

【苔屋】とまや(その1)

雨風をしのぐだけの粗末な小屋、スゲやカヤなどで編んだ苔で屋根を葺いた簡単な小屋を苔屋といいます。昔の外馬屋・海岸の漁師のたまり場・農家の年季奉公人の仮住居などにその用例が見られます。

茶の湯の世界での「苔屋」は、藤原定家の

・見わたせば花も紅葉もなかりけり浦の苔屋の秋の夕ぐれ 『新古今集』

の歌を引いて、侘び茶の神髄を表す銘として扱われてきたことは皆様ご存知のとおりです。

徳川黎明会に「苔屋」という銘の大名物唐物文琳茶入があります。この銘は竹中重義(1562～1615)の依頼により、遠州が茶入の風情から「見渡せば…」の歌を引いて「苔屋」と名付けたと『松屋日記』にあります。これが私の知る限り茶の湯の世界に最初に登場する「苔屋」です。

唐物にしては張りが弱く、印象的な景色もない素朴な釉がみごとに銘に適っています。遠州の鑑賞眼と古典文学の素養が見事に重なった例といえましょう。

私事ながら、遠州そして銘に興味を持ち始めたのはこの茶入を実見したときからでした。

・珠光・引拙・紹鷗の心の事

この三人共に基づくところ趣向あり。

珠光は

見わたせば花も紅葉もなかりけり浦の苔屋の秋の夕ぐれ

この心を用、これすなわちさびたる躰を専らに用ゆくなり。利休愛す。

引拙は

淋しさはその色としもなかりけり楨立つ山の秋の夕ぐれ

紹鷗は

村雨の露もまだ干ぬ楨の葉に霧立ちのぼる秋の夕暮

これすなわちすゝきあけてさはやかなる躰なり。道安好み紹鷗に本づくなり。これ、茶の湯根元なり。ごとくこの何れも宗匠それ基づくところありゆきて用う。後世弟子たるものこの意味を常に工夫できる事なり。 『石州三百ヶ条』より

『石州三百ヶ条』は片桐石州の口伝を無住軒小泉了阿が筆記したものです。延宝元年(1673)石州没後の編と思われます。

茶匠の心境を古歌に当てはめる論法はこれが初見です。

『石州三百ヶ条』では珠光と利休を、紹鷗と道安を同系と捉えている点に石州の卓見が示されているように思います。こうした論法は元禄三年(1690)頃の『南方録』に引き継がれます。

・紹鷗ワビ茶の心は、新古今集の中、定家朝臣の歌に、

見わたせば花も紅葉もなかりけり浦の苔屋の秋の夕ぐれ

この歌の心にてこそあれと申されしと也、花紅葉はすなわち書院台子の結構にたとへたり。(中略)又、宗易今一首見出したりとて、常に二首を書付信ぜられし也、同集家隆の歌に

花をのみ待らむ人に山里の雪間の草の春を見せばや

これ又相加へて得心すべし

『南方録』より

「見わたせば…」の歌は紹鷗の心に適い、宗易(利休)がさらに家隆の歌を付け加えたというのです。「花紅葉はすなわち書院台子」という記述に、台子と侘び茶を両極として点前を格づけする茶道観が元禄頃に始まっていたことが見て取れます。

<http://www.morita-fumiyasu.com/>

~ Copyright (C) 2011 ~私の書齋~ 森田文康. All Rights Reserved.~